

【氏名】 中嶋 直樹

【所属大学院】(助成決定時)

総合研究大学院大学 文化科学研究科

【研究題目】

考古学的手法に基づくアンデス中央高地南部における農耕開始期の社会形成過程の研究

【研究の目的】

本研究では、南米大陸の先スペイン期の古代社会、特に海拔 4000m 近いティティカカ湖沿岸で栄えた古代社会を扱う。当該地域はかつてティワナク(紀元後 400 年ころから 1200 年ころ)というアンデス文明有数の古代国家が誕生した地域である。この国家誕生直前から、国家の成立期にかけての社会形成過程について、なぜ厳しい生態学的環境の中で社会階層が生じ得たのか、どのようにして国家への準備は行われたのか、を明らかにしてゆく。さらに、当時の人々の精神世界を推し量るため、儀礼が執り行われたとされる公共建造物遺跡の発掘を行う。これにより、当時の支配者階級のイデオロギー操作が、どのようにして行われていったのかを明らかにし、社会統合へ果たすイデオロギー操作の実態も解明する。最終的に、生態学環境へどのように人間が反応し、また、それは人間の精神面にどのような影響を与え、どのようにして複雑な社会構造が形成されたのか、そのプロセスを明らかにする。

【研究の内容・方法】

2007 年 8 月から 12 月にかけて、ボリビア共和国ラパス県にあるカリヤマルカ(Kallamarka: 公共建造物)遺跡および、カンタパ(Kantapa: 住居址)遺跡において、発掘調査を行った。

公共建造物は、広場に試掘溝を設け改変の変遷を探った。最低でも 3 度の大きな改変を受けている。また、広場は傾斜地になっているため下方は、地面の高さをなるべく均すため数度の大きな改変が行われている。広場内の構築物のほとんどは、2 回目と 3 回目の大きな改変時に造られている。しかし、実際には、それ以上に、細かな改変が行われていたと見られる。

住居址遺跡は、2006 年の発掘区を拡張し、より平面的な広がりを理解できる方法を採用した。結果として、昨年発見できなかった構築物を複数発見し、また、その周囲に現段階で 7 個の炉を確認した。これだけの炉が、構築物と同じ面において見つかった例は、ボリビアではまだなく、非常に貴重な考古学資料を現地へ提供することとなった。

2008 年 1 月から 2008 年 2 月にかけて、発掘後の遺物の登録・整理を行った。住居址遺跡の発掘から出土した土器と層位関係により、これまで現地で利用されてきた既存の型式分類に問題があることが確認された。本調査により、新しい土器型式編年の再考が促されることになった。

また、これら異なる性格の遺跡出土の遺物分析では、形成期後期には、公共建造物(広場)と住居址からの出土遺物にほとんど差異が見られない。ただし、住居址遺跡は、形成期中期と呼ばれる紀元前

800年から紀元前200年ころの古い時代の層も見つかっている。両遺跡の同時代の遺物に関しては、打製の石鍬、石核、剥片石器、石鏃(ただし両遺跡とも表面採集品)、碎片、擦り石と乳棒などが、共通する石器遺物で、組成的にも、両遺跡においてほとんど差は見られない。出土土器は、形成期中期・後期について、儀礼用と目されている塗彩された精製土器は、両遺跡とも出土していない。骨について専門的分析は終わっていないが、全体を見通したところ、両遺跡ともラクダ科動物骨が多数を占め、部位についても、両遺跡においてほぼ共通している。

【結論・考察】

形成期後期における公共建造物遺跡における儀礼活動は、俯瞰的に見れば、日常生活と密接したものであった可能性が示唆されるが、今後の調査によりさらに検証されなければならない。ティワナク期に入ると、儀礼の場が、今回発掘した公共建造物(広場)から、100mほど北へ移動していることが、地形測量や地表面の調査で確認され、儀礼用の精製土器のみが地表面に散乱し、日常生活用の非塗彩土器は別の場所に集中している。この区域は今回の発掘調査範囲に入っていないため詳細は不明だが、ティワナク期に入ると、儀礼の場と日常生活の場において、明瞭な区分が現れる傾向が見られる。儀礼と日常生活について、場についての明瞭な区分は形成期にも見られるが、出土遺物の構成から考察される、儀礼の性質や社会における儀礼の意味や位置づけは、形成期とティワナク期では、かなり異なっていた傾向が示唆される。

形成期には日常生活と密接した儀礼が行われていたと思われる。やがて、これら形成期に儀礼をつかさどっていた集団は階層化され、儀礼そのものも権威化され、古代国家とよばれるティワナク社会・文化の核を生み出したのだろう。